

Title	キパルスキーの詩学(その1)
Author(s)	山本, 進
Citation	大阪外国語大学学報. 35 p.121-p.132
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80572
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

キパルスキーの詩学 (その1)

山 本 進

PAUL KIPARSKY ON POETICS, Part I

Susumu YAMAMOTO

This paper is a Japanese translation of “Metrics and Morphophonemics in the Rigveda” written by Paul Kiparsky (Massachusetts Institute of Technology) which appeared in *Contributions to Generative Phonology*, edited by Michael K. Brame (1972).

はじめに

ここで紹介するのは ポール・キパルスキーの詩学論文である。彼に 翻訳の許可を得たのは、1973年11月2日付の訳者への私信によるのであるから、もう2年間以上も、そのままにしておいたことになる。遅筆をわびる。

リゲ・ヴェーダにおける韻律および形態音素論

ポール・キパルスキー (MIT)

(山本ススム訳)

1. 序：韻律および形態音素論

前代の言語学者たちが具体的なことは余り述べなかった基本的には心理学的な問題に対して、変形文法は答えようとしている。しかしながら、これまでのところ、これらの新しく提起された諸問題に対する解答は、大体において、構造主義言語学から受け継いだ、閉じた言語体系内における規則性を形式的に分析するという古い方法論によって今だに追求されているが、どのくらいまで有効であるか疑問である。文法を個別話者を越えた「内在的」体系とみなす構造主義においては、言語の形式の結合の規則性を最も「優美に」記述するということ事で事足りた。たいていの言語学者にとって、ある分析が正しいか誤まっているかについての問題は、実際上もちあがらなかった。しかしながら、もし、言語学の目標の一つとして、個別話者が効果的に伝達することを可能にする子供時代に獲得した規則の体系の研究をかかげるならば、ある分析が正しいか誤まっているかという問題は、明確な意義を有するし、また無視することもできない。そうすれば、も

し、最も巧みな解決法（最も巧みな解決法とは一体どんなものであるかについても意見の一致が見られると仮定して）は同時に常に正しい解決法、すなわち、言語獲得状況において実際に到達する解決法であるはずだと述べるということになり、また同じ問題を考えるというはめにならないようにしようとすれば、我々はその言語「内」にとどまることはできない。

理論の優美性以外に正しいことの判断基準を設定することに頭を悩ませることは、物理学のような分野においては、たぶん時間の浪費であろう。しかしながら、言語学における状況は言語運用／言語能力および共時／通時の区別がある故に独特である。言語理論（特に音韻論）が説明しようとする類いの事実は、多くの場合、全く異った説明的パラダイム〔模範〕によって解釈することもできる。実際、そのパラダイムは言語学なかんずく歴史言語学および比較言語学において長い間成功をおさめてきている。

たとえば、共時的文法における音韻規則は同時にではなく順序だって適用されるという生成音韻論の主張について考えてみよう。この主張を証明するには、順序づけ仮説が、現在まで研究されてきたすべての言語の音韻交替を優美に説明するという（もちろんそれ自身完全に正しい）観察を行うだけでは不十分である。順序規則の議論がもしもそんな簡単なものであったなら、言語学者たちは百年前に順序規則による共時的文法に達していただろうし、40年代・50年代のアメリカ言語学界に一時代を画した順序規則のすべての痕跡をまっ殺しようとした構造主義者たちの激しい努力と、それ以前のソシュールの『インド＝ヨーロッパ諸原語の母音の原始体系についての覚え書き』から『一般言語学講義』への発展は全く理解できないものとなるだろう。共時的文法が順序規則を有すると仮定することによって説明される規則性の大部分は、言語は次から次へと起こる音変化をこうむりやすいという事実（この事実は共時的文法についてどのようなことを判断しようとも認められなければならない）によっても先験的に説明されうる。ゆえに、共時的規則とそれらの順序づけを説明しなければならないという重荷は、音変化とそれらの相対的年代順によってすこし軽減される。

言語の共時的構造は話者によって記憶されたパラダイムによってのみ構成されており、ある言語の音韻論における結合の規則性はすべて共時的には偶然であって歴史的説明のみを有するという伝統的な仮定のどこが悪いのであろうか？ その質問には現在ではいくつかの方法によってうまく解答があたえられている。たとえば、音変化の過程それ自体を順序規則をもった共時的言語構造の概念なしでは完全には理解することができないということは今や明らかにされている（Halle, 1962; Postal, 1968）。また、共時的順序は決して年代順の機械的な反映ではない。多くの場合、通時的順序と共時的順序は異なっており、両方の概念が言語記述には必要な要素である（Kiparsky, 1968a）。さらにどのような「音変化」にも対応しない規則、たとえば、英語からビッグ・ラテンに転換させる規則とか、小さな子供たちによってその場でおのずから付加される諸規則とか、もまた他の音韻過程に関して順序だてられなければならない（Chomsky and Halle, 1968; Applegate, 1962; Stampe, 1969）。明らかにそのような場合には音変化に基づく歴史的な説明はありえない。純粋に歴史的な用語で説明することのできない順序規則を含む共時的音韻構造が存在することをこれらは示している。

しかしながら、歴史的および共時的説明の領域がお互いにどこで終わるかという問題がまだ残っている。この問題を解決するためには、話者における内蔵された規則の体系の性質を現在以上に知らなければならない。この研究において、言語の結合の規則性に対する伝統的な「内在的」研究以上に得ることのできるものは、現在なさそうである。だから、利用できるもしくは手にはいりうる経験的データに照らして試験されうる生成音韻論の仮説が体系外に対して言えることをすべて探求することは、生成音韻論の一つの重要な仕事となる。

生成音韻論の理論に暗に含まれている心理学的な主張をテストすることができるとみられる有望な経験的なデータは数多くある。それらの大部分は残念ながら利用されないままであるけれども、近年そのあるものは集中的に研究され、よい結果をおさめている。ここでは、本当に言語学的洞察をもたらしたと言えるものだけをあげておこう。

(1) 幼児言語。これは伝統のある研究分野であって、解説はいらない。

(2) 言語障害。Jakobson (1942), Weigl and Bierwisch (1970) を参照せよ。

(3) 直接的心理実験。心理言語学の研究はこれまで統語論の問題に集中している。音韻論の側面においてなしうることの例は Zimmer (1969) および [Savin and] Bever (1970) [原書ミス]。

(4) 借用。Hyman (1970a, 1970b) は、外来音は基底形式によって知覚されうることを議論し、この事実を用いて音韻分析の抽象性についての制約の存在の可能性を研究した。

(5) 正書法。ある言語の理想的な正書法はどのようなものであるかという問題は、理論的に興味深いばかりではなく、明らかに大きな実際上の問題でもある。良い正書法は少なくとも部分的には形態音素的であるべきということを、多分たいていの言語学者は同意するであろう (Voorhoeve, 1959, 1961; Chomsky and Halle, 1968), しかしながらこの信念の証拠は主として逸話的经验にもとづいている (たとえば, Sapir, 1933)。だが、たいていの生成音韻論に現われる基底形式は正書法の基礎として適当であるとは思われない。文字のない言語の話者にいろいろな書記体系を教えた時の実際の体験について野外調査員とか伝導師からもっと情報が得られればよいのと思う。

(6) 歴史言語学。歴史的証拠が音韻理論に有用であるいくつかの事例は Kiparsky (1968a) において提出された。

(7) 韻律論。韻律的制約は、文境界・語境界・音節・音量・強勢などの言語学的項目がからむ。韻律が、規則の集合として意識されないで、ある世代の詩人たちから次の世代へ例示によって伝達されている口伝詩の伝統においては特に、これらの言語学的項目の性質についての興味ある糸口を見つけ出し得ることがしばしばある。この論文はこの問題への一つの貢献をなすものである。

詩行において韻律論的に問題とされる特徴は、音声学的なものである。すなわち、(その特徴を消滅させる言語変化が起こり、その言語のそれ以後の時代において吟唱された時は別だが) 詩人によって意図された吟唱において可聴的であるということは、長い間、韻律理論でそのまま受け入れられていた公理であった。Sturtevant が述べたように、「作詩法の義務的特徴は何らかの点で可聴的でなければならない」(1924: 337)。百年前、この概念は実際、公理というよりもむしろ定理であった。その当時優勢だった音韻論の観点からすれば、音声学的要素の分布以外に

言語の音韻構造に対応するものはなかった。Sturtevant 以外の立場は事実考えられなかった。音韻構造において、形態音素で表わされる、より抽象的な形式の存在が言語学者たちによって認識されるに至って初めて、音韻構造のこれらのより抽象的な形式が、何らかの韻律的機能をはたしているか否かを問題とすることが可能になったのである。それらがたしかにある一つの機能をはたしているということが、事実であるかどうかによって解決される可能性がある。もちろん、必然的にそうだとは言えないが。

この問題の初期の議論の一つは Jakobson (1963) によってなされた。行中休止などの作詩法の特徴は、南スラブ口伝叙事詩の吟唱において何らの物理的休止としても音声学的に可聴的ではなく、またこの観察は他の詩の伝承においてもみられるということを彼は指摘した。可聴性制限のかわりにヤーコブソンが提案したのは、作詩法の特徴は潜在的に可聴的である、すなわち、当該言語において——行中休止の場合は休止として——物理的にその特徴が現われる可能性があるが、吟唱のスタイルがこの言語的選択を詩においては利用しなかった、と考えることであった。音韻論と韻律論との関係についての伝統的な見解に対する上記の当然な修正でさえも、まだ十分ではないことが、ラドビア民謡の韻律を論じた Zeps (1963) の論文で示された。Zeps は、口語レット語で義務的である語尾母音消失の規則は詩行の律読において随意的に無視されることを示した。つまり、語尾音消失によって n から $n-1$ 音節に縮約された単語は、韻律的に n もしくは $n-1$ 音節として計算されうる。しかしながら、ヤーコブソンの提案は Zeps の観察と矛盾しないように思われる。というのは、語尾音消失によって削除された音節は歌唱においては回復することができる（しかも興味深いことに必ずしも元の母音であるとは限らない）ことを Zeps は注記しているからである。

Ingermanland [地名] で記録され、Sademiemi (1951) が記述しているフィンランド叙事詩『カレワラ』の韻律は、作詩法というのは音韻表示のさらに抽象的な形式に基づくのであって、潜在的な可聴性は必ずしも必要ではないことを示している (Kiparsky, 1968b)。韻律的制約が適用される音韻表示は音声的ででもなく、形態音素的ででもない。少なくとも3つの規則の適用のあと、そして少なくとも4つの規則（そのうちの1つのみが随意的である）の適用のまゝに到達する中間表示である。例えば、pojain 「私の息子」（2音節、語頭長音節）の形態音素表示は /poika + ni/ (3音節、語頭長音節) でなければならないが、その律読は *pojaini (3音節、語頭短音節) である。この形式は次のような派生によって生じる：他のすべての派生の場合と同様に、韻律的

基底形式	/poika + ni/	(-xx)
語中音添加	poikaini	(-xx)
語中閉音節における子音変差	pojaini	(-xx)
短母音と、長母音又は二重母音との間の子音重複	pojaini	(-xx)
母音脱落	pojain	(-x)

他のすべての派生の場合と同様に、韻律的遮断点は、子音変差規則の適用の直後にある。ここでとくに興味深いことは、この方言のどの歴史的段階においても *pojaini という形式が音声的

にかつて存在したとする根拠は何らないということである。これらの律読を歴史的発展のなごりだと説明するどのような試みも初めから除外すれば、その歴史的変遷は *poikani*→*poikaini*→*pojaini*→*pojain* であった可能性が大きい。

古アイスランド押韻詩についての Anderson (1969) の発見も同様に、韻律制約は音声レベルで（随意的であっても）実現しない派生の段階にかかるかもしれないことを示唆している。Lasnik（個人談話）は、古英語頭韻が同様にして働らく証拠をみつけた。

そのような韻律論体系を与えられると、視点を逆転させ、韻律論が形態音素論について示すものに照らして形態音素論を見ることができる。2つの可能な分析のどちらをとるか決まっていない場合に、純粹に内在的・構造的考察がなされる限りにおいて、問題となっている言語要素の韻律における行動が、言語理論がどのような共時的分析を用意しなければならないかについての糸口を与えてくれるかもしれない。これらの糸口によって十分武装すれば、言語理論そのものを試みに、これらの新しい発見と矛盾しないように、改訂し、究極的には、韻律上の・歴史上の・その他の証拠によって他の言語における分析結果と対比してその改訂を点検することができる。

2. リグ・ヴェーダ韻律の問題

この論文において、リグ・ヴェーダの韻律もまた非音声表示に適用し、音韻論および形態素論の視点からいえるいくつかのことをさらに押し進めたい。しかし、言語学的に最も面白いリグ・ヴェーダの諸相に焦点をしばり、私の主張を完全にするために必要な文献学的な傍証の大部分とサンスクリット語の歴史および前史に対して我々の諸発見から言えることのほとんどすべての部分ははずしておく。これらの話題は Kiparsky (forthcoming) においてとり上げられるだろう。

数多くの例において、リグ・ヴェーダの伝統的テキストにおいて *y* と *v* と表示されているセグメントは音節的 *i* と *u* として律読されなければならない。というのは、そのこと以外はまったく規則的な音節計算が正しくないからである。たとえば、1詩行に11音節を持ち、第4もしくは第5音節ののちに行中休止をもつことを必要とする韻律 (*Triṣṭubh* トリシュトゥブ) の讃歌においては、伝承上次のように書かれ吟唱される詩行がある：

ā śaṣṭyā saptatyā somapéyan (2. 18. 5)

この詩行が韻律の必要条件を満足させる唯一の方法は、はじめの単語（「60」）を3音節 *śaṣṭiā*¹ と読むことである。一方、「70」を意味し形態素的に平行な形式の第2番目の単語は非音節 *y* (*saptatyā*) で読まれなければならない。リグ・ヴェーダにおいてこの種の音節回復が必要なことは長い間知られていた。そして次のようなことも言われていた、すなわち、*y*, *v* の音節的 *i*, *u* の律読は特に重音節のあと、つまり、先行する音節の母音が長母音であるかもしくはその母音が2つ以上の子音に後続されている時に、頻繁である。だから、上に引用した詩行における *śaṣṭiā*

1 その発音がどのようなものであったかを判断しないで、*ia* と書いて韻律上の回復を示すことにする。実際の発音は *ia* ではなかっただろう。*ya* もしくは *iya* のいずれかであったろう。後者は高母音と低母音との間にわたり音をそう入する規則によるものであろう。

(CCiV̄) : saptatyā (V̄CyV̄) の対照は、一般的分布を代表するものである。

テキストにおいて y, v を i, u に音節回復がしばしば必要であることと、先行する重音節がそのことを促進しているという一般的な観察を説明する最初の体系的な試みを行なったのは Sievers (1878) である。韻律は発音を反映しているという公理の路線にそって、ジーフェルスは、リグ・ヴェーダの伝統的なテキストは制作された時代の実際の発音を反映してはいず、古典サンスクリット語の規則がリグ・ヴェーダの伝統的なテキストに輸入されたことを反映していると仮定した。古典サンスクリット語においては、i と u はある特別な条件下以外では、母音の前で一般的に y と v になり、リグ・ヴェーダの現存するテキストはこれらの規則にまったく厳密に従っている。だから、もとの発音は律読によって示される発音であると、ジーフェルスは仮定した。そこで、ジーフェルスは次のような音法則を提案した。その法則によれば、母音の直前では i は y と、u は v (= [w]) とそれぞれ相補分布をなし、 $\frac{\bar{V}C_1}{\bar{V}C_2}$ の後では音節的異形が出現し、その他の母音の前の場合には非音節的異形が出現する。ジーフェルスの考えは Edgerton (1934, 1943) の論文において詳しく述べられた。Edgerton は重音節が後続する半母音の律読を促進することを疑いもなく示す証拠を集めた。(以後、半母音という用語を i, y, u, v を包含する語として用いることとする。) しかしながら、この規則には多くの例外がある。それらの例外を説明するために Edgerton は、一つには、類推がもうすでに、ジーフェルスの法則の操作に干渉し始めていたという仮定をし、もう一つには、リグ・ヴェーダ詩人たちは、完全には使えない部分的に人為的につくりあげた方言で作詩したという仮定をした。

ジーフェルスの法則に対する一見例外的なものの説明としていわゆる「詩人たちの不完全な言語使用」をもち出したことは根拠が全く弱い。他の点では詩人たちはヴェーダの複雑な形態素論をまったく上手にあつかい、現代の文法家たちがほとんどときほぐすることができないでいる強勢体系を扱うのに何らの困難さも感じていない。ジーフェルスの法則はリグ・ヴェーダ韻律体系の基底となっている区別、すなわち、重音節と軽音節の区別に依存している表層的音声規則であるのに、詩人たちの「言語無能力」がジーフェルスの法則を順守できないというところにしこく集中しているのは何故であろうか？ また、もしジーフェルスの法則の一見例外的なものが言語無能力に由来するのであれば、通常言語的・文献的判断に従って、より後代の派生的な作詩であるようなリグ・ヴェーダの部分において、より頻度が高くなるだろうと思われる。しかしながら、全体として、Arnold (1905: 105) が統計的に示したように、リグ・ヴェーダのすべての通時層においてほとんど同じぐらいである。

その解答は詩人たちの言語無能力に求めるべきではなく、リグ・ヴェーダが作詩された言語的・文献的体系内に求めるべきであるということを示すもう一つの証拠は、通常どちらでもよい場合、音節的律読と非音節的律読との間の選択は詩のしくみの中で重要な役割をはたしているということである。その選択は異なった韻律ます目に公式を位置づけるように働くことができる。時には、同一句の同一単語が連続する 2 行において 2 つの異なる方法で律読されることもある。リグ・ヴェーダの韻律は、1 つの音節分だけ詩の全体もしくは 1 詩句が長くなったり短くなったりする機会がすぐに現われるように構成されている。たとえば 12 音節の Jagati ジャガティーは、

11音節の Triṣṭubh トリシュトゥブの第2詩句に1つの音節を単に付加したものである。1.85の第5連で讃歌はジャガティーからトリシュトゥブに転換し、その転換は、第4連の最終行(12音節)を第5連の第1行(11音節)でくり返すことによってなされている。

vīṣavṛātāsaḥ / pīṣatir āyugdhuam (5+7)

「雄々しき隊伍をつくる汝らが、斑ある〔羚羊〕を繋ぎたる(とき)」

prā yād rathēṣu / pīṣatir āyugdhvam (5+6)

「汝らが斑ある〔羚羊〕を車に繋ぎたる(とき)」

ここで āyugdhuam / āyugdhvam という韻律上の選択は、韻律的相違を越えて実質的平行性を維持すべく機能している。

これらの韻律の行中休止が第4もしくは第5音節のあとにありうるので、同様な状況が出現しうる。たとえば、4.35.5では次のような2つのトリシュトゥブ詩行がある。

śaciā/karta / pitārā yuvānā (5+6)

śacyā/karta / camasām devapānam (4+7)

ここでは第1詩句は二度用いられているが、異なる韻律的価値を持っている。このような例はそれらが基準から逸脱したものではなく、基準の一部をなすものであるという印象を与える。それらに対しては、ジューフェルスの法則という既成の形式に対する例外というラベルをつけるよりも、この詩でそれらの使用を可能にしている言語的・韻律的条件を考察すべきであろう。

事実、「例外」と予想されるものをつぶさに観察してみると、Edgerton が考えたよりもずっとその環境は言語学的に体系的であることがわかる。半母音が重音節の後にある場合の -dhvam / -dhuam の選択の例は上で述べた。この接尾辞の選択は他の接尾辞、たとえば -dhyas, -dhyām と同様に、事実この環境でしか存在しない。軽音節の後では、これらの接尾辞は規則的に非音節の y, v として律読される。上述の第2例は、軽音節の後の選択: śaciā / śacyā についてであった。問題となっている接尾辞、すなわち 具格・単数 -ā の前の語幹形成の ī はこの選択を軽音節の後のみ許す。重音節の後では、それは規則的に音節的セグメントとして律読される。たとえば ūtiā のように。さらに、nadī「河川」における語幹の /i/, /ū/ のように、形態音素論的に強勢のある半母音はつねに母音の前の位置では音節的に律読される(たとえば具格 nadyā=nadīā) ので例外的なので当面無視することにすれば、すべての接尾辞中の半母音はこれらの2つの範疇のどちらかに入る。換言すれば、重音節の後でも軽音節の後でも適用の条件が満足されているすべての接尾辞においてはジューフェルスの法則は有効であるが、すべての接尾辞は、2つの環境のうちの1つでジューフェルスの法則に対するかなり大きな部分の「例外」をも示す。だから、重音節の後で規則的に音節的である半母音をもつ接尾辞(たとえば、語幹形成の -ī-, -u- や -ya による動名詞)は軽音節の後で随意的に非音節的律読をされ、重音節の後で随意的に音節的である半母音をもつ接尾辞(たとえば、-dhvam, -dhyas)は軽音節の後で規則的に非音節的 y, v である。語幹 a の属格・単数 -sya のように形態素論的理由によって2つの環境のうちの1つにしか生起し

ない接尾辞も若干ある。接尾辞が二分されるという主張が適用しうる縮少形においては、上述の律読可能性は有効である。軽音節の後の -dhuam の3例のように例外が散在するが、Arnold (1905) に従って、記述された場合に存在する本当の意味での選択とこれらの散発的な場合とを区別する。故に、重音節の後と軽音節の後で同じように取扱われる y および v をもつ接尾辞は存在しない。

要約すれば、半母音を有する接尾辞には2種類あり、それらのうちのいくつか、もしくはすべては母音の前で生起する。第1の場合は、半母音の支配的な異音に従って i-、u- 接尾辞と名付けるが、母音の前にある半母音は、重音節の後で規則的に音節的であり、軽音節の後で随意的に音節的である。第2の場合は、y-、u- 接尾辞と名付けるが、母音の前にある半母音は、重音節の後で随意的に音節的であり、軽音節の後で規則的に非音節的である。

次に、各類の重要なメンバーのリストをかかげる。各類についてもっと知りたければ、Arnold (1905, 第5章), Edgerton (1934, 1943) —— 後者は完全に信頼出来るというわけではない ——, Wackernagel-Debrunner の相当箇所, グラスマンの『リグ・ヴェーダ辞書』における韻律表記 (これもすべて正確であるというわけではない), Whitney の文法書, Macdonell の文法書を参照されたい。

次のような接尾辞が第1の i-, u- 接尾辞類に属する：

(1) 母音語尾を持つ属格・於格・双数 -os および 具格・単数 -ā の前の語幹形成の -i-。例、規則的に ūtiā (ūtí「助け」), しかし自由に suṣtutiā もしくは suṣtuyā (súṣtuti「美しき讃歌」)。

(2) 同上の場合の語幹形成の -i-。例、規則的に pátniā (pátnī「女主人」), しかし交替的に tmāniā / tmānyā (tmán「自身」の女性形 tmānī)。

(3) 同上の場合の語幹形成の -u-。例、規則的に bāhuós (bāhu「腕」), ádhenuā (adhenu「乳を与えないこと」), しかし panvá (panú「賞賛」) / hānuā (hānu「顎」)。

これらの3つの場合のおおのに、いくつかの興味ある暗示的なこみいった点がある。それらのいくつかについてはこの論文の後の方で簡単に述べるつもりである。その他 (男性形 -i- および -u- 語幹については Kiparsky (forthcoming) を参照。第4番目の半母音語幹接尾辞 -ū- は実際上つねに強勢があるので音節的である。だからここでは問題とならない。

(4) 母音語尾の前の現在時制 -nu-(-u-)。古典サンスクリット語では全く規則的に ジーフエルの法則を反映している。prāpnuvanti「彼らが到着する」, sáknuvanti「彼らは何々できる」対 sunvanti「彼らが圧する」, prahinvanti「彼らが推し進める」。しかし、軽音節の後で、リグ・ヴェーダ韻律が音節的価値を示す例がいくつかある。たとえば、dhánvantu, śṛṇvántu の他に dhānuantu「彼らを流す」, śṛṇuántu「彼らに聞かせる」(Arnold, p. 96参照)。

(5) 希求法 -yā-。このわたり音は、重音節の後では規則的に音節的と計算され (Arnold, p. 96), 軽音節の後では時として音節的と計算される、たとえば, aśyāma / aśiāma「我らが得ることのできますように」。

(6) 動名詞 -ya。重音節の後ではこの韻律形式は規則的に -ia- である、たとえば, vária「選ばれる」, márjia「清められる」, sámisia「ほめられる」, および yódhia「戦われる」。軽音節の後ではこの場合も両方の可能性がある, hávya / hávia「祈り願われる」, gúhya / gúhia「隠される」, sásia「ほめられる」, および ayudhya「戦われない」。

(7) 動名詞 -tva。この形成は -ya の動名詞よりもずっと少ない。したがってそれだけ証拠が確かでない。しかし、この接尾辞がこの範疇に割り当てられることは可能性が高い。重音節の後では, kartva を除いて、常に -tua である。² 弱音節の後では、この接尾辞をもつことが確かめられた動詞 2 つはつねに -tva である (jánitva, sánitva)。重音節の後では規則的に -tua であるにもかかわらず、軽音節の後では -tua が生起しないことは次のような事実によって充分説明される。もし、問題の形式が、-tua と律読されたなら、続けて少なくとも 3 つの軽音節が出てしまう。このことは、基本的には長音節と短音節の交替によって成立しているリグ・ヴェーダにおいては全く都合の悪い音節連続である。だから、jánitva, sánitva は音節的／非音節的の選択の自然な韻律の実現である。

(8) 比較級 -yas / -iyas。この場合は、2 つの点で他の多くの場合と異なっている。第一に、y はここでは短い i (y) と交替せず、長い i (y) と交替している。第二に、子音連結の後の現在時制接尾辞 -nu- の場合と同様、音節的な形式が 伝承本文そのものに示されている。分布はこの類の接尾辞に典型的なものである。重音節の後はずねに -iyas である。例, óhiyas「より強い」, mámphiyas「より寛大な」。軽音節の後では -iyas も -yas も生起する。例, távyas / táviyas「より強い」, návyas / náviyas「より新しい」, sáhyas / sáhiyas「より強い」, および pányas / pániyas「より栄光ある」。

現在時制指標辞 -nu- と比較級接尾辞が リグ・ヴェーダの現存する校訂本において、重音節の後で母音字で綴られている理由は明白である。これら 2 つの場合、音節的な形式は古典サンスクリット語にも残っていた。本文が、ある種の表面的な方法で、ヴェーダ以後の音韻体系に適合するように、初期に標準化された。だから、そのような音節的な形式は、自らのサンスクリット語の形式によってこの標準化をした校訂者にとっておなじみである所だけ本文に残された。

この第 1 の接尾辞類には少なくとも 1 つの辞があると思う。すなわち、非常に頻度の高い接尾辞 -ya である。これは名詞から派生名詞・派生形容詞を形成する。この接尾辞は、ある程度まで -nu- および -yas / -iyas と次のような 2 つの性質を共有している。つまり、その音節的形式 (-iya) は伝承本文において示されている、また、この形式はゾーフエルの法則の環境において、古典サンスクリット語にも残っている。これは、前の段落で示した 2 つの現象の間の関係を確認する事実である。しかしながら、いくつの名詞派生 -ya 接尾辞を区別すべきなのかについては確かでない。たぶんいくつかあって、少しずつ異なった音韻作用をもっているのであろうと思う。

2 2.24.5 における Grassman と Whitney の “bhāvītva” はまちがいである。その形式は Arnold が示しているように bhāvituā でなければならない。

さて、次に第2の y-, v- 接尾辞類について考えよう。すなわち、この類の接尾辞においては、重音節の後で半母音は随意的に音節的であって、軽音節の後では規則的に非音節的である。この類には次のような接尾辞が含まれる：

(1) 与格・奪格・複数 -bhyas。重音節の場合、prajābhyas / prajābhias (prajā「子孫」) がある。軽音節の後では選択の余地がなく、ṛṣibhyas (ṛṣi「予言者」) という様式が義務的である。Arnold (1905: 94) を見よ。

(2) 具格・与格・奪格・双数 -bhyām。この事例は上記と全く類似している（前掲書同ページを見よ）。

(3) 現在時制形態素および受動態形態素 -ya-。軽音節の後では非音節的律読が義務的であり、重音節の後では音節的律読もまれではあるが可能である（as からの不完了 āsiat「彼は投げた」が3箇所。Arnold, p. 95, Edgerton 1934: 255 参照）。

(4) 2人称・複数語尾 -dhve, -dhvai, -dhvam。(Arnold, p. 94.)

(5) 2人称・単数中間態命令法 -sva (同上)。

(6) 未来時制形態素 -sya- (Arnold, p. 95; Edgerton, 1934: 254)。

(7) 過去分詞 -vas (Arnold, p. 95; Edgerton, p. 255)。

(8) 動名詞 -tyā, -tvā, -tvi, -yā (Arnold, p. 95)。

(9) 前接語 tvā (同上)。

(10) 派生接尾辞 -va (同上)。

(11) 抽象名詞形成の -tva。例、rakṣastuām「魔法」/ anāgāstvām「罪からの自由」、しかし、軽音節の後では規則的に -tvam, 例、amṛtatvām「不死」および vasutvām「富」(Arnold, p. 94)。

(12) 形容詞形成接尾辞 -vant「何々をもっている」(Edgerton 1934: 255)。

接尾辞をこのように2類に分類したことと、各類の作用についての説明はどのようにすればよいか？ この分類が純粋に韻律論の問題ではないことは最初から明らかである。それに対する答えは言語学的考察をも含むであろう。この分類の言語学的基础を設定し、次いでその言語学的分類が韻律上の諸事実をいかに説明することができるかを示せば、その問題に答えたことになるであろう。

(3. 以下つづく)

参考書目

Anderson, S. R. (1969). "West Scandinavian Vowel Systems and the Ordering of Phonological Rules." Ph.D. Dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Applegate, J. (1961). "Phonological Rules in a Subdialect of English." *Word* 17:186-193.

Arnold, E. V. (1905). *Vedic Metre*. Cambridge: University Press.

Chomsky, N., and M. Halle (1968). *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.

- Edgerton, F. (1934). "Sievers' Law and IE Weak-Grade Vocalism." *Language* 10:235-265.
- (1943). "The Indo-European Semivowels." *Language* 19:83-124.
- Halle, M. (1962). "Phonology in Generative Grammar," *Word* 18:54-72.
- Hyman, L. (1970a). "How Concrete is Phonology?" *Language* 46:58-76.
- (1970b). "The Role of Borrowing in the Justification of Phonological Grammars." *Studies in African Linguistics* 1:1-48.
- Jakobson, R. (1942). *Aphasie, Kindersprache, und allgemeine Lautgesetze*. Reprinted in *Selected Writings*, vol. I. The Hague: Mouton.
- (1963). "On the so-called Vowel Alliteration in Germanic Verse." *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung* 16:85-92.
- Kiparsky, P. (1968a). "Linguistic Universals and Linguistic Change." In *Universals in Linguistic Theory*, edited by E. Bach and R. Harms. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- (1968b). "Metrics and Morphophonemics in the Kalevala." In *Studies Presented to Roman Jakobson by His Students*, edited by C. Gribble. Page references are to the reprint in *Linguistics and Literary Style* (1970), edited by D. C. Freeman. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- (forthcoming). "Sievers' Law."
- Postal, P. (1968). *Aspects of Phonological Theory*. New York: Harper and Row.
- Sadeniemi, M. (1951). Die Metrik des Kalevala-Verses. *Folklore Fellows Communications*, no. 139.
- Sapir, E. (1933). "The Psychological Reality of Phonemes." Reprinted in *Selected Writings of Edward Sapir*, edited by D. G. Mandelbaum. Berkeley: University of California Press.
- Savin, H. B., and T. G. Bever (1970). "The Nonperceptual Reality of the Phoneme." *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 9:295-302.
- Sievers, E. (1878). "Zur Akzent- und Lautlehre der germanischen Sprachen." *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 5:63-163.
- Stampe, E. (1969). "The Acquisition of Phonetic Representations." In *Proceedings of the Fifth Chicago Linguistic Circle Conference*, edited by R. I. Binnick. Chicago: University of Chicago (Dept. of Linguistics).
- Sturtevant, E. (1924). "The Doctrine of the Caesura, a Philological Ghost." *American Journal of Philology* 45:329-350.
- Voorhoeve, J. (1959). "An Orthography for Saramaccan." *Word* 15:436-445.
- (1961). "Le ton et la grammaire dans le Saramaccan." *Word* 17:140-163.
- Weigl, E. and M. Bierwisch (1970). "Neurophysiology and Linguistics: Topics of Common Research." *Foundations of Language* 6:1-18.
- Zeps, V. (1963). "The Meter of the so-called Trochaic Latvian Folksongs." *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics* 7:123-128.
- Zimmer, K. (1969). "Psychological Correlates of Some Turkish Morpheme Structure Conditions." *Language* 45:309-321.

訳者参考書目

- 高津春繁著『印欧語比較文法』岩波全書187, 岩波書店, 1954.
- 榊亮三郎著『解説梵語学』種智院大学出版部, 1907.
- 辻直四郎著『インド文明の曙』岩波新書619, 岩波書店, 1967.
- 訳『リゲ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫, 岩波書店, 1970.

- 他訳『インド集』世界文学大系4，筑摩書房，1959.
- 他訳『ヴェーダとアヴェスター』世界古典文学全集3，筑摩書房，1967.
- 安井稔編『新言語学辞典』研究社，1971.
- 編『新言語学辞典（改訂増補版）』研究社，1975.